

Glocal Tenri



2

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.2 February 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
就職超氷河期・・・？
／深谷忠一 1
- ・ 天理教海外伝道の資料 (24)
満州伝道関連史料⑥
／深川治道 2
- ・ 天理教伝道史の諸相 (2)
教祖ご在世時代
／早田一郎 3
- ・ 「襲のあわいに深く入り込んでいって…」
をめぐって (1)
襲のあわい——その火口①
／松田健三郎 4
- ・ 現代世界に生きる「人間」と「宗教」(1)
「わたし」は誰？—人間存在と意味世界—
／岡田正彦 5
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の
民族誌学 (35)
キリスト教徒はフラを踊れるのか？
／井上昭洋 6
- ・ 「いのち」をつなぐ—生死の現象 (2)
序
／堀内みどり 8
- ・ 世界平和のための宗教対話 (30)
EX VOTO とナイジェリアでの迫害
／山口英雄 9
- ・ 現代ジェンダー論展望 (18)
家事労働者の権利条約と介護労働者
／金子珠理 10
- ・ 天理スポーツ (21)
天理スポーツ シンポジウム⑩
／難波真理 11
- ・ 平成 23 年度公開教学講座
「現代社会と天理教」(2)
第9講：かんろだい世界への道—目指す
ものとその道程—
／深谷忠一 12
- ・ English Summary 13
- ・ おやさと研究所ニュース 14

巻頭言

就職超氷河期・・・？

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

新年明けて1カ月、この時期に大学関係者にとって最も気になることは、学生の就活(就職活動)状況です。まず、12年春卒業予定の4年生については、彼らの進路がどこまで決まっているかを確認して、卒業までに全員の就職先が見つかるようにしなければなりません。

また、13年春卒業予定者には、就活の意識に目覚めて動きだすための指導をする必要があります。昨今の学生の多くは、親掛かりでのんびり育っていますから、自分が社会に出て自立するという現実感に欠けています。就職情報サイトなどで見て漠然とした夢を描いているだけで、自らは少しも動けない人が多いのです。ですから、そういう学生たちに、モラトリアムはまもなく終わるのだと認識させる必要があるのです。

学業を終えて社会に出るのは人生の重大事です。慎重に就職先を選ぶのは当然でありましょう。しかし、昨今の日本の若者は(という言い方は老人の定型句だと承知しながらも…) 就活に対して余りにも受身の人が多いように思えます。

目指す会社が、“自分のやりたい仕事をさせてくれるか？”“自分に生き甲斐を与えてくれるか？”“自分の生活を保障してくれるか？”等、“相手が自分に…”を先ず考える。中には、“自分がやりたいことが何か分からないので、それを見つけてくれる会社に入りたい”などという人もいます。また反対に、“自己分析をした結果、自分には相応しい仕事がないので無理に就活をしたくない”などという人までいるのです。

一方、学生を採用する側の方では、面接試験で“うちの会社にあなたはどんな貢献ができますか？”などと訊ねます。給料を出すのだから当然の質問だと思うのですが、訊かれる相手はその会社にまだ入っていないのですから、会社案内などに載っている文章をなぞるくらいが精一杯で、諮問者が求めるような返答をするのはとうてい無理なのです。しかるに、そういうことを考えずに、採用側が学生に過剰な期待をするので、“採りたい人材がいなかった”ということになるのです。

マスコミなどでは、ここ数年ずっと“就職氷河期”だといわれますが、実際には、過去10年間を見ても、大学生の最終就職内定率は90%を超えています。また求人倍率も毎年1.0をちょっと上回る程度ですから、数字的には労使双方の希望をほぼ満たせるレベルにあるのです。それにも関わらず、会社側からは「人を採らなかつた」という声が聞こえてくるし、学生の中には10～20社も受けてだめな人がいたりして、超就職氷河期だなどと騒がれる。それはお互いに相手のことを考えない、雇用者と就活者双方の自己中心主義によるミスマッチの結果なのです。

“And so, my fellow Americans¹, ask not what your country² can do for You; ask what you can do for your country.² My fellow citizens³ of the world, ask not what America⁴ will do for you, but what together we can do for the freedom⁵ of man.”

とは、第35代アメリカ大統領ジョン・F・ケネディの就任演説の有名な一節です。

傍線部分を¹ (Students) ² (Corporation) ³ (Employers) ⁴ (Employees) ⁵ (happiness)等の言葉に入れ替えて、就活に臨む学生とその保護者、そして採用する側の人にもぜひ読んでもらいたいと思います。

そして、さらに申せば、天理教の教祖は、“はたらくとは、はたはた(傍々)を楽にさせることや、人間は、はたらくために生れてきたのやで”と教えられています。自分が楽をして喜ぶのではなく、傍々を楽にさせることを喜ぶのが、人としてのあるべき姿なのです。(学業を終えて天理教の布教専務になる人は、まさにそのことを実行しようとしている人たちなのです。)

会社は従業員を“傍々を楽にする働きをする人材に育てる”ために採用する。従業員は、“傍々を楽にする働きをする場を提供してもらう”ために入社する。お互いがそういう意識で就活をするようになれば、陽気ぐらし世界に向かって一歩前進できるだろうと思います。そのためには、先ず我々道の者が、“傍々を楽にする働き”の手法を示していかねばならないと思う次第です。